

資料

ナイジェリア南西部の精神科病院入院患者に対する インタビュー調査

金田 知子*¹ 落合 雄彦*²

Interviews with Inpatients at Psychiatric Hospitals in Southwestern Nigeria

Tomoko KANATA*¹, Takehiko OCHIAI*²

In Nigeria, like many sub-Saharan African countries, data concerning mental health issues are still sketchy. In particular, information about people with mental illness is not very explored. Their experiences are often invisible and their voices cannot be heard. The aim of this paper is to reveal the experiences of psychiatric patients in Nigeria, placing them in the centre of the examination. In August and September 2004, the authors carried out semi-structured interviews with inpatients at Psychiatric Hospital, Yaba, and Neuropsychiatric Hospital, Aro, in Southwestern Nigeria. Through the interviews, information on how they accept their mental health problems, how they deal with them, what kind of treatment they have been provided, what kind of support they have received and what they would like to do in the future became apparent. All names of the patients are pseudonyms.

はじめに

2004年8月25日から9月1日にかけて、筆者は、ナイジェリア南西部にあるヤバ精神科病院 (Psychiatric Hospital, Yaba: ラゴス州ラゴス) とアロ精神神経科病院 (Neuropsychiatric Hospital, Aro: オグン州アベオクタ) に短期間滞在し、同病院の入院患者14名に対してインタビュー調査を実施した。本稿は、そのうち9名分のインタビュー記録を再構成して研究資料としてまとめたものである。

インタビューは、面接者が主要な質問項目を事前に準備し、それにほぼ沿った形で質疑応答を進めながらも、被面接者の自由な発言や話題展開を妨げることとしないという、いわゆる半構造的な形式で実施した。コミュニケーションには英語を用いた。

以下の9名の記録は、①基本属性 (名前, 年齢, 性別, 民族), ②診断名, ③家族構成, ④生育歴, ⑤病歴, ⑥入院生活, ⑦問題・ニーズ, ⑧将来の希望, ⑨面接者のコメント, という9項目からそれぞれ構成されている。ケース1～3はヤバ病院, ケース4～9はアロ病院の入院患者に対するインタビューの記録である。なお、プライバシー保護の観点から、被面接者の名前はすべて仮名を用いている。また、事例の公開については、被面接者からの同意をえている。

*1 関西福祉大学社会福祉学部, *2 龍谷大学法学部

ケース 1

①基本属性

ローラ (32歳, 女性), ウリョボ人

②診断名

妄想を伴ううつ病

③家族構成

家族は、地方公務員として農業協同組合に勤務する父、そして母、兄3人、本人、妹、弟の合わせて8人。1番上の兄はロンドン、次の兄はウリョボ、3番目の法律家の兄と妹はラゴス、弟は両親とともにデルタ州エウにそれぞれ住んでいる。

④生育歴

ナイジェリア南部の町ベニンシティに生まれる。ラゴスのポリテクニクで会計学を勉強したが、その頃に眼球が揺れる症状が出てきてしまい、勉強が続けられなくなった。1999年にポリテクニクを中退した。

⑤病歴

「初めて症状が出始めたのは、父親がアソロック（大統領官邸）に私を連れて行くために首都アブジャを訪れたときでした」と本人はいう。「その原因は隣人に妖術をかけられたためです」とも主張する。「もし、妖術をかけられたのであれば、なぜ呪医（juju doctor）のところに行って問題を解決しないのですか」と質問すると、「私はアングリカンの家に生まれたが、いまはグローリー・タイム・チャーチ（Glory Time Church）の信者であり、神様の力を強く信じているので、呪術師に頼ることはしません。ただ、イエス様の偉大な力を信じます」という答えが返ってきた。初めて精神科病院に入院したのは、今年（2004年）6月のことであり、そのときはヤバ病院のボロフカ病棟に入院した。病院へは兄が連れてきてくれた。初めて来たときには、裸にされて点滴を打たれた。

⑥入院生活

ヤバ病院では午前5時に起きて水浴びをし、そのあとは寝たり、友人と話をしたりして過ごしている。就寝は午後7時で、薬は、青色、黄色、茶色などの6種類を飲んでいる。以前は心臓に石があるような感じがしていたが、いまはだいぶ軽くなった。病院では、作業療法の一環としてしぼり染めをやった。3番目の兄や妹がときどき面会に来てくれる。今週末に初めての週末外泊（week-end parole）に行くことができるので、それを楽しみにしている。

⑦問題・ニーズ

眼球が揺れて、目が見えにくいことが困る。

⑧将来の希望

退院後はラゴス市内のスルレレ地区に戻って、電話を使ったビジネスをしたい。

⑨コメント

彼女はナイジェリア南部の少数民族ウリョボ人の出身である。小柄（150cmほど）で大人しそうな感じの女性であり、上半身には白いブラウスを着て、腰にはプリント生地の布を巻いており、髪を後ろで束ねている。声が小さく、話していても視線が定まらない。最初は緊張していた様子であったが、次第に笑顔を見せるようになった。面接のお礼に日本から持ってきた扇子を渡すと、とても嬉しそうに手を握ってきた。⑥のなかで、錠剤の色に関する言及がみられるが、ナイジェリアで

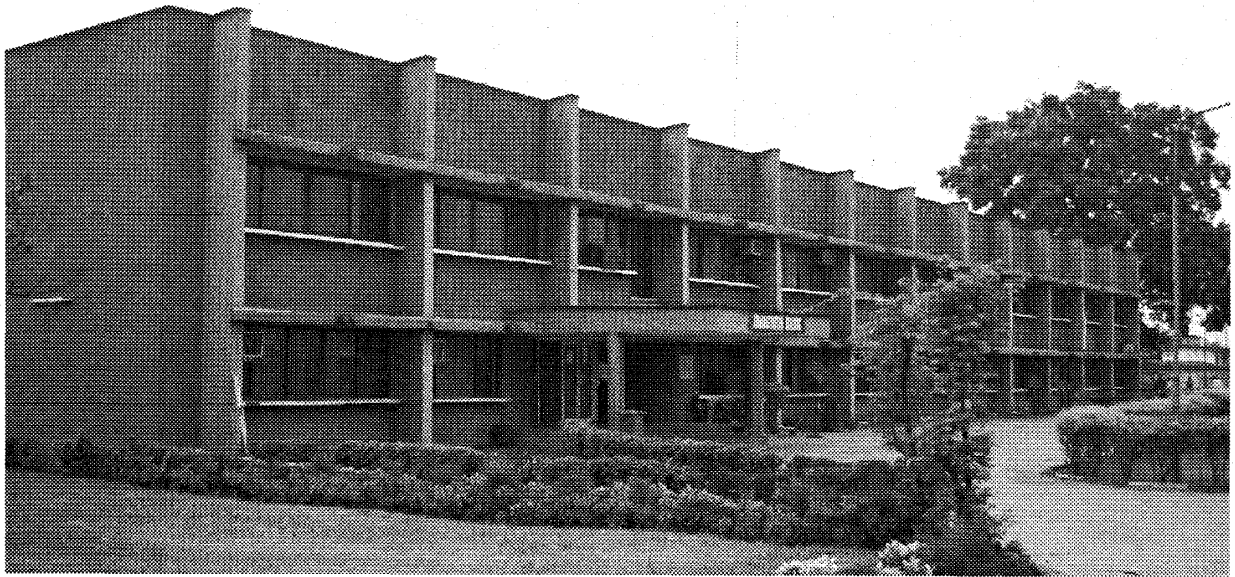


図1 ヤバ病院管理棟

は錠剤の色は必ずしも薬の種類を示しているわけではなく、同じ薬でも分量が異なる場合には色を変える。このため、彼女は必ずしも6種類の薬を服薬しているとは限らない。また、同じく⑥のなかで週末外泊に言及しているが、ナイジェリアの精神科病院では、入院患者が寛解に向かう過程のなかで、リハビリテーションの一環として週末外泊を認めることがある。病院関係者からの情報によれば、彼女は18歳のときにレイプされた経験をもつという。当時婚約者がいたが、彼女が結婚までは処女でいたいと主張して婚約者との性交渉を拒んだため、それに腹をたてた婚約者が自分の友人に彼女をレイプさせた。彼女は、その事実を受け入れることができず、いまだに自分自身は処女だと主張しているという。

ケース 2

①基本属性

アデバヨ (40歳, 男性), ヨルバ人

②診断名

統合失調症 (本人は、診断名は聞かされていないという)

③家族構成

父はムスリムであり、7人の妻がいた。自分の母は2番目の妻で、きょうだいは全部で20人もいる。父はガラスや塗料の輸入業を営んでいたが1987年に死去し、母も1985年に死去した。

④生育歴

ラゴス州で生まれる。専門技術学校を22歳のときに卒業した。その後職を探していると、ラゴス市アゲゲ地区で公務員の修理工として働くことができることになった。しかし、やがて人員削減によって解雇され、その後はナイロンバッグを工場から仕入れてきて、それを商人に卸す仕事をするようになった。ナイロンバッグ販売はたいした収入にはならなかったが、それでも食べていくことはできた。その頃は、アゲゲ地区にある父の2階建ての家に、家族6人と賃借居住者6人で生活していた。

⑤病歴

症状が初めてあらわれた時期は不明だが、最初の入院は1997年だった。道路を走り回るようになってしまい、姉によってヤバ病院に連れてこられた。入院のときは、注射を打たれて数日間眠った。2カ月間入院して、その費用は自分で支払った。その後、退院して定期的に外来診察を受け、服薬を続けた。薬は就寝前に飲むラガティーン（クロルプロマジン）のみで、薬代は半年で600ナイラ程度だった。しかし、今年になって服薬をやめたため、6月に再入院することになってしまった。

⑥入院生活

午前4時から5時の間に起きて、水浴び、朝食、その後はおしゃべりをしたり、卓球をしたりして過ごす。午後9時頃に就寝する。自分は、修理工や商売の経験があり、作業療法はつまらないと感じるので行かない。薬は、アドール（ハロペリドール）、ラガティーン（クロルプロマジン）、アーテン（トリヘキシフェニジル）を服薬している。特に副作用は感じない。2週間に1回程度、姉、母（実母ではない）が面会に来てくれる。

⑦問題・ニーズ

お金がほしい。今回の入院費用は、自分がメンバーであるキリスト使徒教会（Christ Apostolic Church）が負担してくれている。だから、退院後に入院費用を返済しなければならないかもしれない。以前は貯金もあったが、いまは全然ない。

⑧将来の希望

今週末に退院する予定でいる。退院したら、以前住んでいたラゴス市スルレレ地区で部屋を借りるつもりだ。自分には洋服の仕立てをしているガールフレンドがいて、いずれは彼女と一緒に住みたいと思っている。

⑨コメント

大柄な男性（180～190cm）で、面接時は緑色のパジャマ姿を着用していた。ときどき笑顔を浮かべる。メンバーとなっているキリスト使徒教会は、ナイジェリアのホーリネス系教団であり、彼の所属教会は約60名の信徒がいるという。自分の家族に対しても、ムスリムからキリスト教に改宗するように勧めたことがあるが、いま彼らがどうなっているかはよくわからないという。⑤にあるように、外来診察のときの薬代は半年で600ナイラ必要であったというが、それは2004年8月時点の為替レート（1米ドル＝138ナイラ）で換算すると4米ドルほどでしかない。本人も、外来患者時代の薬代は大きな負担ではなかったという。

ケース 3

①基本属性

ラディポ（44歳、男性）、ヨルバ人

②診断名

薬物依存症（コカイン、ヘロイン、カンナビス）

③家族構成

妻は南部の都市エヌグ出身で、現在、保険会社のマネジャーとして働いている。また、15歳、8歳、5歳の娘が3人いる。妻はラゴスで生活しているが、現在は2カ月間の休暇をとってドバイ（アラブ首長国連邦）に行き、そこで商品を仕入れて持ち帰り、エヌグで販売している。その間は、

同じ建物に住む母親が子どもの世話をしてくれている。母は、ラゴスでナイジェリア醸造会社系列の主要な販売会社を営んでいる。母には、医師になったがロンドンで死亡した長男、法律家になって現在ロンドン在住の長女、本人、薬剤師としてラゴスで働いている次女、大学生の時に死亡した三女の5人の子どもがあった。

④生育歴

ラゴス市内のラゴス島で生まれる。大学では会計学を専攻し、23歳で卒業する。その後、公認会計士になるためにナイジェリア公認会計士学院 (Institute of Chartered Accountancy Nigeria : ICAN) に学ぶ。同時に、塗料会社の販売担当者としても働く。この頃から薬物を使い始めるようになった。26歳のときに公認会計士になるための試験 (Professional Examination : PE3) に合格し、27歳で結婚をした。イボ人である妻とは、学生時代に大学対抗競技大会 (Nigerian University Game : NUGA) に出場した際に出会った。自分はヨルバ人だが、その後彼女と交際を続けて結婚した。嘘をつくことと物を盗むことができない性分なので、彼女との最初のデートのときに自分が薬物乱用者であることを告白した。彼女はそれを承知の上で結婚してくれた。だから、彼女はいまでも入院中の私のことをサポートしてくれる。28歳のときに公認会計士の資格を正式に取得した。銀行で会計士補として働き、当時の月収は8万ナイラもあった。その後、昇給して14万ナイラの月給をもらうまでになった。しかし、43歳で失業してしまった。その後、ヤバ病院への入退院を繰り返している。家にいるときは3人の娘と遊んだり、勉強をみてあげたりすることが楽しかった。あとは心理学の本を読んだりするのも好きだった。

⑤病歴

23歳の頃に薬物を始めた。航空会社に勤めていた男性の友人が不規則な勤務にもかかわらず、いつでもぐっすり眠れるのを知り、「なぜ、そんなによく眠れるのか」と尋ねたところ、最初は何も言わなかったが、そのうちに彼が薬物を使用していることを教えてくれた。それから自分も薬物を始めるようになった。薬物をやっているときは平穏な気持ちになり、とてもリラックスできた。そのリラックス状態は2～3時間ほど続いた。27歳のとき、医師であった兄に連れられてロンドンの病院に6カ月間入院する。その後、16年間薬物をやめていたが、43歳で失業してしまったことが契機となって、また始めるようになった。失業してからというもの、毎日のように薬物を使用していた。母親から小遣いとして1日1000ナイラ、妻から500ナイラをもらい、「ジョイント」(joint) に行って薬物を買求めた。特に、朝は身体が薬物を渴望するので、毎朝のようにジョイントに行き、1500ナイラでコカインを吸った。また、午後はコカインに4000～5000ナイラを使った。コカインを飽きるまで吸った。薬物を売るジョイントは、ラゴス市内のいたるところにある。よく警察が調べに来たが、ヤバ病院の診察券をみせたら見逃してくれた。警察に見つかった他の人たちは、キリキリ刑務所に連れて行かれたり、病院に入院されたりした。

入院歴は、①1987年(6カ月)、②2003年(2カ月)、③2003～2004年(2カ月)、④2004年(7月～現在)の計4回ある。2003年から入退院を繰り返しているのは、薬を飲まなかったことが原因だ。ラガティーンを飲んでいて、集中力がなくなり眠くなるので、求職の妨げになると思ってやめてしまった。今回、なんとしても薬物をやめたいと思い、自分の意思で入院することにした。今回の入院のときは、母が付き添ってくれた。

現在は、ラガティーン(1日500mg)とビタミン剤を服用している。ラガティーンを飲むと、と



図2 アロ病院正門

でも眠くなって集中力がなくなる。そのときはアーテンを服薬する。特に副作用らしいものはない。病院にいるときは、薬物を使わなくても大丈夫だと感じる。しかし、薬が切れた直後は攻撃的となり、身体が震え、涙や鼻水が止まらなくなる。

⑥入院生活

薬物から離れていられるので、ここにいるときは平穏な気持ちになれる。午前6時に起床し、水浴び、点呼、朝食、服薬、作業療法などをする。いまは収入がないので、今回の入院費は母親が負担してくれている。今回の治療費だけで4万～5万ナイラかかっていると思う。母が週1回は面会に来てくれる。昨日も母が来て、自分や他の患者のために料理を作り、帰っていった。そのときに妻からの手紙ももってきてくれた（“My dearest sweetheart”という書き出しで始まる手紙を面接者に見せてくれる）。ロンドンにいる姉も自分のことを心配してくれて、ナイジェリアに帰ってきたときは会いに来てくれる。娘たちは父親が薬物依存症であることを知らない。娘たちへの影響を恐れて、家ではけっして薬物に手を出さない。母や妻、娘たちのことを考えると、なんとしても薬物をやめなければならないと真剣に思う。医師であった兄も亡くなり、もし自分までもが亡くなれば、家族に申し訳ないと思う。自分に薬物を教えてくれた友人は、すでに結核で亡くなってしまった。

⑦問題・ニーズ

薬物依存症者の病棟から外に出られないこと。週末外泊が他の病棟では認められているが、薬物依存症者の病棟では許されていない。でも、いまの段階では家に帰りたいとはまだ思わない。

⑧将来の希望

将来は、公認会計士としてではなく、自分で何かビジネスをしたいと思っている。たとえば、ミニバスを購入してそれを運行するような仕事をしてみたい。会計士として事務所を構えるためには、いろいろとお金もかかり、また経営もけっして容易ではない。毎日の収入が確実なミニバス・ビジネスの方がいいと思う。母のビジネスは、彼女が元気な間はやりたくない。母もまた、自分が再び

薬物に手を出すのではないかと心配しているので、あえて仕事を手伝ってほしいとはいわない。

⑨コメント

大柄（190cm）で体格がよい。質問にも適確に対応してくれて、妻からの手紙まで見せてくれた。面接の最後には、「インタビューを終わりにさせたくない。もっとあなたたちと話をしたい」と言ってくれた。日本から持参したお礼の扇子を渡すと、「妻にプレゼントしたい」と言っていた。ジョイントは、ラゴス市内のいたるところにあるという。ジョイントでは、通常2人が一組で薬物の販売を行う。つまり、1人が小屋のなかでマリファナやコカインの販売を担当し、もう1人が小屋の外で見張り番をするのである。売人たちは男性であることが多いが、ときには女性もいる。ジョイントには、大学を中退した若者、泥棒、会社員、労働者、失業者などいろいろな人が集まるという。⑤にあるように、ジョイントでは、コカイン1回分が1500ナイラであったというから、2004年8月時点の為替レート（1米ドル＝138ナイラ）では、ほぼ10米ドルということになる。このほか、ヘロインは1回100ナイラ（約72セント）、カンナビスは1回20ナイラ（約15セント）、タバコは1本5ナイラ（4セント）であったという。ジョイントには、子ども連れで来る人たちもいたらしい。本人は、ナイジェリアで現在急成長をとげているリデームド・クリスチャン・チャーチ・オブ・ゴッド（Redeemed Christian Church of God：RCCG）のメンバーであり、RCCGがラゴス郊外のボカという場所に薬物依存症者専用の施設（Christ Against Drug Abuse Ministry：CADAM）をもっていることを教えてくれた。

ケース 4

①基本属性

タイウォ（38歳、男性）、ヨルバ人

②診断名

薬物依存症（ヘロイン、マリファナ、タバコ、ビール）

③家族構成

両親はナイジェリア南部のイジェブオデに住んでいる。父親は元高級官僚で、現在は自分の中学校を経営している。父親には3人の妻がいて、自分の母は最初の妻だった。すでに自分の母以外の妻は他界している。自分は8人きょうだいの7番目にあたる。1番上の姉は医者になり、イバダンの大学付属病院に勤務している。その他のきょうだいのうち、2人はイジェブにおり、他はラゴスに住んでいる。

④生育歴

ラゴス市内のイコイ島に生まれ、子どもの頃はラゴス大学のスタッフスクールに通学していた。14歳のとき、教員をしていた兄に勧められてタバコを始めた。16歳でインディアン・ヘム（マリファナ）を始め、ヘロイン、そしてコカインとエスカレートしていった。20歳でオグン州立大学に入学し、宗教学を学んだ。学費のためのお金を薬物入手に使ってしまい、両親が旅行で不在のときに退学処分になった。22歳のときに1回目の入院をする。イバダン大学付属病院の医師をしている姉の勧めで、父親がアロ病院に連れてきてくれた。そのときは1カ月間入院した。入院直後の2～3日間は薬物をしたいと思ったが、その後は大丈夫だった。しかし、退院したその日にヘロインを買いに行き、その後毎日薬物を使用するようになった。薬物をするとうハイになり、頭が朦朧として、

ときに眠くなった。28歳のときに3階から飛び降りて足を骨折し、それ以来足に軽い障害が残るようになった。足を骨折したときには、一般病院に3カ月間ほど入院した。入院中も攻撃的になり、しばしばタバコを吸っていた。

テクニカルカレッジにある購買部の店員としてこれまで働いてきた。最初の頃の月給は1000～2000ナイラだったが、いまは1万ナイラまで昇給した。朝はインディアン・ヘム、昼はヘロイン、夜はローカルジン（ウルゴロ）を飲む生活を送った。夜飲んでいるときは、自警団の連中に捕まらないようにするために、遅くとも午後10時には家に帰るようにした。ありとあらゆるジョイントに行き、薬物を買った。お金がなくなると、親のところに行ってお金をせびった。親も自分が薬物をしていることは知っていたが、どうすることもできなかった。しばしば攻撃的になってガラスを割ったり、物を壊したり、まったく手がつけられない状態だったから、親は自分を放っておくしかなかったのだろう。

35歳のときにイバダン大学に入学した。給料をもらいながら大学に通う通学休暇（study leave）をとることができたので、いまも給料はもらっている。大学時代もコカインを吸い、ローカルジンもかなり飲んでいた。でも、勉強は好きだった。

⑤病歴

14歳で兄に勧められてタバコを始め、その後、兄は途中でやめたが、自分は16歳からインディアン・ヘム、ヘロイン、コカインとエスカレートしていった。22歳のときに医師をしていた姉が勧めてくれて、アロ病院に1カ月間入院した。入院なんてしたくなかったので、いつも周囲と喧嘩をしていた。28歳のときに3階から飛び降りて骨折して一般病院に入院したが、入院中も攻撃的だったので適切な治療をしてもらえなかった。それが原因で、いまも右足に痛みがあり、左足の裏に傷が残ってしまった。今回の入院は、姉が働いている病院で暴れて逮捕されたことが直接の原因だ。逮捕されてそのままアロ病院に連れてこられた。その後、マラリアと肺炎になって12日間ほどは別の病院で治療を受けた。現在の入院は6カ月目となる。

薬はラガティーン、アーテンを服薬していたが、いまはラガティーン（1日200mg）を服薬している。皮膚の感染、あくび、足の痛みがある。

⑥入院生活

朝は6時に起床、8時半から祈祷会に参加し、その後テレビ、スポーツ、作業療法、グループセラピーなどを行っている。本を読むのが好きなので、図書館をよく利用する。水曜日から土曜日は1時間だけ病棟の外に出ることが許可されるので、そのときはテニスをする。ここの治療費は姉が負担してくれている。入院時に2万ナイラを支払い、その後8千～1万ナイラを払っていると思う。母は脳卒中の後遺症があるが、ときどき面会に来てくれる。姉は入院費を支払いに来るだけだ。他のきょうだいは来てくれない。友人はいるが、彼らは私が入院していることを知らない。イバダン大学の同級生は私より年下なので友人とはいえない。ソーシャルワーカーは、月給の支払いをチェックするのに一緒に付いてきてくれたことがある。

⑦問題・ニーズ

特にない。

⑧将来の希望

3週間後に退院する予定でいる。ぜひ外国に行きたい。みんなは私が精神的におかしいことを知



図3 アロ病院薬物病棟

っているので、誰も私のことを知らないところに行きたい。将来は教師になりたいと思う。父が経営する学校で教師をするかもしれない。

⑨コメント

非常に穏やかで、普通に話を聞いていると、とても好青年の印象を受ける。暴力を振るうようにはみえない。通常の年齢よりもかなり遅れて大学に入学したため、大学での友人が少なく、孤独感を味わっていることがうかがわれる。

ケース 5

①基本属性

オルシェグン（28歳，男性）

②診断名

薬物依存症

③家族構成

両親と姉と妹がいる。父は建設業，母は商売をしている。姉はエド州立大学を卒業してアブジャで仕事を探している。妹はオグン州立大学で経営学を専攻している。

④生育歴

ラゴス市エブテメッタ地区で生まれる。23歳でエド州立大学に入学し，国際関係論を専攻した。大学生時代は，同じ大学へ通う姉と同居していた。両親からの仕送りは月に8千ナイラしかなく，貧しかった。多くの学生は2万ナイラほどもらっていた。

⑤病歴

19歳のとき，パーティで友人に勧められてインディアン・ヘムを初めて吸った。18歳の頃からタバコやビールはやっていたが，インディアン・ヘムを吸うとハイな気分になり，元気がでた。逆に吸わないと落ち着きがなくなり，攻撃的になり，眠れなくなってしまった。大学生時代には，インディアン・ヘムは，朝50ナイラ，夜50ナイラを払って吸っていた。タバコは1日4本吸い，帰宅後

にビールを5本程度飲んでいて、25歳のときにヤバ病院に6週間ほど入院した。退院後、1カ月で服薬をやめた。今回の入院は2003年11月の入院から数えて9カ月目にあたる。薬はラガティーン(50mg/日)を飲んでいる。

⑥入院生活

現在のアロ病院では、図書館に行ったり、グループセラピーを受けたりしている。週1回のカウンセリングが楽しみだ。両親や姉妹が月1回くらい面会に来てくれる。通常はお金の管理は看護師がするが、お金のない人に対してはソーシャルワーカーが相談にのってくれる。

⑦問題・ニーズ

特にないが、自分が低所得者層の出身であることが嫌だ。

⑧将来の希望

他の大学に移りたい。できれば自分のことを知っている人がいない大学、たとえばアブジャ大学に行って、マスコミュニケーションを勉強したい。以前交流のあった薬物依存症の仲間とは関係を断ち切って、まったく新しい友人を探したい。

⑨コメント

面接中も貧乏ゆすりを続け、落ち着きのない様子にみえた。もしかすると、それは薬の副作用あるいは禁断症状かもしれない。病院スタッフの話によると、現在のナイジェリアの大学生の6~7割は大麻を吸った経験があるのではないかとのこと。この患者の場合、近く退院の予定であるが、大学があるエド州に彼を戻すべきなのか、親元に戻すべきなのかが決まらず、具体的な退院手続きがなかなか進展しないという。親の家計が苦しいことも障害となっている。子どもをなんとか大学に通わせてはいるが、学費とわずかな生活費を送金するだけで家計は精一杯だという。

ケース 6

①基本属性

フンミラヨ (34歳、女性)

②診断名

統合失調症 (以前の病院では、医師は精神病と言ったが、統合失調症とは言わなかった。アロ病院の現在の担当医が病名を教えてくれた)。

③家族構成

両親と6人のきょうだいがいる。自分は3番目になる。69歳の父は法律家で、母は元秘書だった。1番上の姉は小学校を経営している。1番上の兄は統合失調症になり、イギリスの旅券をもっている。現在はイギリスにいて仕事を探している。彼は精神病になったために十分な教育を受けられなかった。社会保障が整ったイギリスで生活している。このほか、イギリスには、イギリス人男性と結婚した叔母や従兄弟もいる。すぐ下の妹はポートハーコートで会計士をしており、次の妹はロンドンで医師をしている。弟はラゴス大学で法律を勉強している。

④生育歴

ラゴスで生まれる。父はロンドン大学を卒業した法律家で、母もロンドンの秘書学校で教育を受けた。私は小学校時代をラゴスで過ごしたが、11歳のときにイギリスに渡り、18歳までを過ごす。サセックスの中学・高校で寮生活を送った。他の3人の姉妹も留学していた。最初は淋しくてホー

ムシクになった。クリスマスにはナイジェリアに帰っていたし、ロンドンのウエストハムステッドに家があったので、家族がそこに集まったりしていた。18歳のときにナイジェリア経済が悪くなり、学費の支払いが継続できないことを恐れた父によって、自分はナイジェリアに呼びもどされた。父は、子どもたちがあまり長くイギリスに住んでいると、ナイジェリアの生活や価値観から離れすぎてしまうのではないかと危惧していた面もあるようだ。ナイジェリアに戻ってから、ラゴス州立大学で法律を勉強した。1993年の大統領選挙無効の混乱で授業ができなくなったりしたために、結局2年遅れて25歳で同大学を卒業した。その後1年間ロースクールに在籍し、法律家になる。そして、26歳のときから父の会社で弁護士として働きはじめる。

ボーイフレンドと別れたことが契機となって、最初の幻聴が聞こえるようになった。そのときは、「部屋を掃除しなさい」という声が聞こえたので掃除をした。しかし、それ以降の4年間、幻聴はまったく聞こえなかった。だから病院には行かなかった。28歳のとき、父が発作を起こし、それが原因で事務所を閉鎖した。そこで父の友人の法律事務所で働き始める。月給は5万ナairaだった。30歳のとき、再び幻聴が聞こえるようになり、奇妙な行動をするようになった。家族がとても心配し、医者である妹に注射を打たれて、スルレレ地区にある民間病院に最初の入院をした。そのときは1週間ほどで退院した。その後、ヤバ病院に移るが、結局そのときは入院をしなかった。2週間に1回、外来診察を受け、服薬治療を続けた。31歳のとき、勤めていた法律事務所のオーナーが裁判官試験に合格したため、事務所が閉鎖されてしまった。その後、コンピュータのコースを受けるが、病気が悪化し、途中でコースをやめた。34歳のときに2回目の入院をした。ヤバ病院の医師が個人経営していた病院に4週間ほど入院した。そのときは入院費用として10万ナairaも請求された。統合失調症の兄が軍病院精神科で治療を受けていたときの知人から紹介され、いまのアロ病院に転院した。

ラゴスでは両親と同居していた。父は、私のために新車を100万ナairaで買ってくれたが、自分は運転ができなかったので運転手を雇っていた。自分の月給は5万ナairaであり、運転手の給料が1万5千ナairaなので、当時はあまり貯金をすることができなかった。映画を見るのが好きだった。

⑤病歴

26歳のときに最初の幻聴が聞こえた。そのときはボーイフレンドと別れたばかりで、彼が幻聴のなかで命令してきた。兄が統合失調症だったので、幻聴について尋ねたが、きちんと教えてはもらえなかった。そのときの幻聴は1回きりだったので、「もう2度と幻聴が聞こえませんが」とお祈りをした。そうしたら、その後4年間は何も聞こえなかった。しかし、30歳になって再び幻聴が聞こえた。幻聴を何とかしようと、手を叩きながら歌を歌って家のなかを歩き回っていたら、医師であった妹が来て注射を打ってくれた。その後、スルレレ地区にある民間病院に入院する。幻聴は、神様か元のボーイフレンドの声のことが多い。「食べなさい」と命令されたり、「俺は死んで、お前やその家族の身体に憑依してやる」「呪術をかけてやる」と脅されたりする声が聞こえた。その後ヤバ病院に移るが、入院はせずに通院をするようになった。

34歳のとき、ヤバ病院の担当医が経営する個人病院に4週間入院をする。その時は10万ナairaを支払った。そこを退院する日に幻聴が聞こえたので、知り合いの紹介でそのまま母に連れられてアロ病院にやって来た。この病院で初めて病名を告げられた。入院生活はうんざりしているが、ここに来たときにはとにかく回復したいと思った。薬はラガティーン50mg/日を服薬している。幻聴は

3週間前に止まり、いまは聞こえない。しかし、薬の副作用かもしれないが、体が震える。体の震えについては、担当医にも伝えてある。

⑥現在の状況

診察は1週間に1回だ。午前6時に起床し、一応、午前中は作業療法の予定になっているが、とても退屈なので週2～3回だけにしている。午後は図書館に行ったり、サイバーカフェでパソコンをやったりして過ごす。前はどこに行くのにも看護助手が監視役としてついてきたが、いまは逃げないとわかってもらっているの、一人で病院内をどこにでも自由に行けるようになった。就寝時間は当直の看護師によって異なる。テレビを遅くまで見せてくれる看護師もいる。

入院する前はタバコを吸ったり、お酒を飲んだりしていたので、担当医は薬物病棟に入るようにと勧めたが、薬物病棟には入りたくない。この国ではタバコも麻薬と同じように扱われている。自分の姉も妹もタバコを吸っているのに、自分だけが薬物依存症者の扱いを受けるなんて嫌だ。

両親がいまの自分をもっともサポートしてくれている。母は2回面会に来てくれた。今度の火曜日に両親が面会に来る予定になっている。友人は私が入院していることを知らない。母は、私の友人には「あの娘はいま外国に行っている」と伝えているようだ。ナイジェリア社会では精神科病院への入院には強いスティグマが伴うので、入院患者はその事実を友人に知らせることができない。

⑦問題・ニーズ

特にない。

⑧将来の希望

近いうちに両親や姉が来てくれて、退院する予定でいる。退院後は、2週間に1回程度アロ病院に通院することになると思う。遠隔地からの入院患者の場合、まずアロ周辺に居住地を見つけてから退院を許可することもあるらしいが、自分の場合にはラゴスに住んでいるので、車で1時間半くらいで通える。ボーイフレンドとの別れがストレスとなり、タバコやお酒の量が増え、体重も増えてしまった。入院前は、タバコを毎日10本吸い、ビールを2本飲んでいて、体重を減らして、弁護士としてまた働きたい。結婚もしたい。

⑨コメント

やや太り気味で、着ているシャツの汚れが目立つ。しかし、イギリスで教育を受けた経験があるため、とても美しいアクセントの英語を話す。質問に対しても実に適確に返答してくれた。しかし、後日、面接者が病棟の廊下を歩いていると、彼女に突如呼び止められた。「ねぇ聞いて。すぐに退院できると思っていたら、みんなが私を薬物病棟に移すというの。絶対嫌よ、そんなの。お願い、助けて」と泣きながら訴えてくる。隣には母親と妹が困った顔で座っていた。母親に話を聞くと、「この子の精神状態が悪くなる時は、必ずお酒とタバコが引き金になっている。それをやめさせないと、また再発するのは目に見えている」という。これに対して、彼女は、「退院したらタバコとお酒は控えるから、すぐに退院させてよ。薬物病棟には絶対に行きたくないわ」と泣いている。看護師に話をすると、「薬物病棟に移ったほうがいいと思うけど、いま薬物病棟には女性患者が一人もいないので、現状では彼女を移すのは可哀相だわ」とのこと。結局、タバコとお酒を控えるという条件で、そのまま彼女は退院となる。

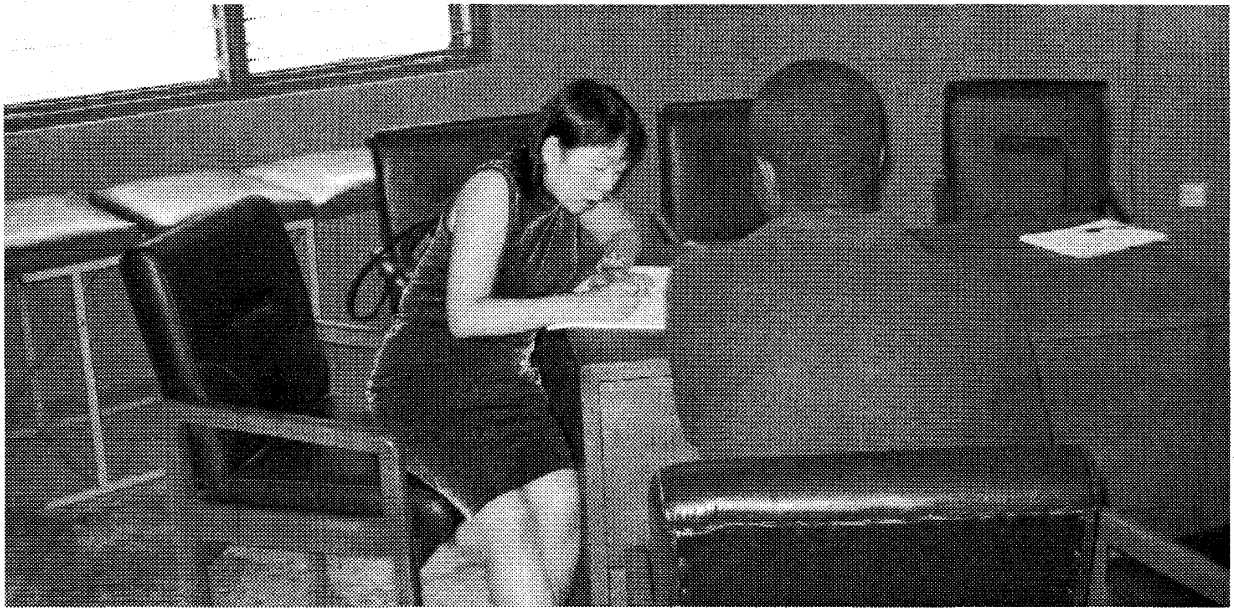


図4 アロ病院でのインタビュー風景

ケース 7

①基本属性

ジョージ (34歳, 男性), イドマ人

②診断名

統合失調症 (アロ病院に来る前は軽度のうつ病または不適応障害と診断される)

③家族構成

父には2人の妻がおり、母は第一夫人だった。7人の兄弟と5人の姉妹がいる。空軍に勤務していた父は2003年に死亡し、母はいまベヌエで学校を経営している。きょうだいには会計士や医師といった専門職が多く、海外在住者も少なくない。母もアメリカで教育を受けた。

④生育歴

北部のカドゥナで生まれる。小学校時代はカドゥナ、中学・高校時代はラゴスで過ごす。その後、バスケットボール奨学生としてアメリカ・インディアナ州の大学に入学した。20歳で短大卒業資格を取得した後、22歳でフロリダ工科大学に入学して建築学を学ぶ。結局、6年間をフロリダで過ごした。26歳で建築家として働き始め、21歳の白人女性と結婚した。28歳で転職したが、結婚生活がうまくいかずに悩み、不眠が続く。精神科医に「軽度のうつ病」「軽度の不適応障害」と診断されたのはその頃だ。妻も感情的起伏が激しかったので、夫婦でカウンセリングを受けた。30歳で会社を辞めて夫婦でサウスキャロライナに転居したが、やがて妻だけフロリダに戻ってしまった。私は友人宅に住みながら仕事を探したが、なかなか職は見つからなかった。妻のことが忘れられず、涙が突然できたり、誰とも話をしなくなったりした。人目が気になり、ずっとサングラスをかけていた。精神科にも通院していた。フロリダにもどって、フロリダ工科大学大学院で海洋工学の修士課程に入学した。

32歳のとき、きょうだいの結婚式のためにナイジェリアへ帰ってきた。そのとき、母は私がアメリカに戻ることに強く反対した。そして、32歳の7月から2～3カ月間、ベヌエ州の空軍病院精神科に入院する。さらに父の勧めもあり、ヤバ病院で診察を受けた。そのときは行動障害という診断

を受けた。その後、南東部のベヌエ州で両親と暮らし始めるが、そこで生活が乱れ始めた。カンナビスやタバコを乱用し、友人とバーやジョイントに行ったりするようになる。さらに物を壊したり、記憶が飛んだりするようになる。今年6月下旬に母に付き添われてアロ病院に来院した。そして、そのまま入院となった。母は私を悪い仲間から引き離れたかったのだと思う。アメリカでは年収が3万2千ドルあった。学費のローンが残っているので、いつかアメリカにもどらないといけな

⑤病歴

28歳で発症した。妻と一緒にカウンセリングに通ったが、結婚生活がうまくいかず、それに仕事の重圧も重なった。通院しながら家で仕事をしていた。入院は、①32歳のときにベヌエ州の空軍病院精神科に2～3カ月、②今回（34歳）の入院、の2回であり、アロ病院に入院してすでに2カ月目になる。薬はオランザピンを服用している。抗精神病薬を飲むと眠くなり、動きや思考が鈍くなってしまう。入院費用は母が負担してくれているが、非定型の薬は高額なので早くやめたい。

⑥入院生活

アロ病院では、サイバーカフェでパソコンをしたり、おしゃべりをしたりしながら過ごしている。薬を飲むと眠くなるので、よく寝るようになった。本来、自分は議論好きで、自分の専門分野のことや天文学のことなどについて、すぐ上の兄と何時間でも話をした。数学の計算式などについて思いついたことがあれば、いまでもメモをとるようにしている。ナイジェリアでは宇宙や物理のことを話しても分かってくれる人が少ないので、ぜひアメリカに行きたい。母やきょうだいはそれぞれ違った方法でサポートしてくれている。ラゴスにいる会計士の妹は、2週間に1回面会に来てくれる。友人はいるが、入院していることは知らせていない。

⑦問題・ニーズ

離婚、借金、病気、失業といったこれまでの苦難やいま抱えている問題について考えると、とてもつらい気持ちになり、不安になる。離婚については、妻が一人で手続きをしたので、ぜひアメリカに行って自分の目で離婚の事実を確かめてみたい。

⑧将来の希望

近く退院する予定でいる。ベヌエ州にいる母とラゴス州にいる妹が迎えに来てくれるはずだ。ベヌエまではここから13時間かかる。ベヌエに帰って仕事を探したい。アメリカではいろいろと仕事があるのに、ナイジェリアでは職が少ない。以前ラゴスで面接を受けたが、アメリカの会社に連絡をとったみたいで、そのときは採用されなかった。

⑨コメント

バスケットボール奨学生に選ばれて渡米しただけあって、身長は2 mほどもある。美しい米語を話す。統合失調症という病気については、まだ受容ができていない様子で、面接者に対しても同症について質問してくる。インターネットでも統合失調症について調べているらしい。

ケース 8

①基本属性

サンデー（26歳、男性）

②診断名

統合失調症

③家族構成

ラゴス在住の両親のほか、妹が1人と弟が2人いる。父は海洋技師、母は小学校の教員をしており、妹とすぐ下の弟は親元を離れて大学生として生活しており、1番下の弟は高校に通っている。

④生育歴

ラゴスで生まれる。小学校時代はラゴス、中学・高校時代はジョスで過ごす。その後、イバダン大学に入学し、最初は医学を学んでいたが、やがて微生物学に専攻を変更した。

⑤病歴

22歳のとき、わけもなく歩き回るようになった。ヤバ病院の外来で初診を受ける。24歳のときに伝統的呪術師のところでハーブ（薬草）を処方してもらうが、あまり効果がなく、3週間ほどでやめた。その後、ヤバ病院の薬にかえて、それを2年間服薬した。25歳の6月に大学に戻って友人と暮らし始める。その翌年5月に再発した。今度はアロ病院に入院する。9週間入院したあと、3週間の仮退院をした。そして、今年8月にアロに戻ってきた。

薬はラガティーン100mgを朝昼晩の3回服薬している。前はアーテンを飲んでしたが、いまは飲んでいない。眼球が上がったりすることもあった。いまはよく眠くなるし、唾液が出る。また、めまいがするなどの副作用がある。

⑥入院生活

午前6時半に起床し、午前中は水浴び、朝食、服薬、作業療法などをして昼食をとる。午後は、昼寝、読書、インターネットなどをする。病棟のテレビが壊れているのでテレビを見ることができない。午後9時半頃に就寝する。作業療法のなかではサッカーをするのが好きだ。家にいるときは、音楽を聴いたり、テレビを見たりするのが好きだった。

両親は資金面でも心理面でも大きな支えとなっている。母は入院費用として2万ナイラほどを支払ってくれた。母は2週間に1回面会に来る。きょうだいや一部の友人も自分が入院していることを知っている。

⑦問題・ニーズ

特にない。

⑧将来の希望

イバダン大学に復学したい。

⑨コメント

155cmほどの小柄な体格で、年齢よりは若年にみえる。声が小さく、ぼそぼそと早口で話す。エド州の少数民族出身で、イボ人のヌワチュク師が創始したエンド・タイム・チャーチ（End Time Church）という教団に属しているという。

ケース 9

①基本属性

ヤクブ（39歳、男性）、イボ人

②診断名

薬物依存症（コカイン）

③家族構成

父は陸軍の元大佐だった。1966年の2度目のクーデタで殺害された。自分は、そのときまだ1歳だった。母は公認会計士で、2002年に肺癌で亡くなった。2002年に結婚し、妻（32歳）はアブジャの官庁に勤務している。1歳半の息子は、ベビーシッターが面倒をみている。

④生育歴

ラゴス市内のイコイ島で生まれる。小中学時代はエヌグで過ごす。15歳の時にイギリスのウェールズに留学し、Aレベルをとった。17歳でアメリカ・メリーランドに留学した。そこで都市計画のディプロマを取得する。19歳でルイジアナに転居し、今度は社会学のディプロマをとった。24歳のときにナイジェリアに一時帰国した。アメリカ人のガールフレンドがいたが、母親に結婚を反対されて断念する。26歳でナイジェリアに最終的に帰国した。ジョス大学でソーシャルワークを専攻し、ディプロマを取得した。ナイジェリアに帰国してからソーシャルワークを専攻したのは、たまたま学生募集の枠が空いていたからで、深い意味はない。他のコースに入ろうとすれば、もう一年待たなければならなかった。しかし、ソーシャルワークのコースに入って、人の話を聞いたり、人と関わったりする方法を学んだ。ジョスではコカインが手に入らなかったため、3～4カ月に1回はラゴスに行って、コカインを吸った。

28歳のときにエヌグでコンチネンタルフードのレストランを開く。それと同時に犬のブリーダーをするようになった。知人がロシアで買ってきたジャーマン・シェパードを3万ナairaで譲り受け（2匹で6万ナaira）、交配させて子犬を3万3千ナairaで売るというビジネスを始めた。これがとても儲かった。子犬を連れて散歩していると、興味をもった人が声をかけてくる。多いときで40匹の子犬がいたこともある。エヌグでは母と同居していた。母は、自分がカンナビスを吸っていることは知っていたが、コカインまでやっているとは思っていなかったようだ。32歳の時にレストランを閉める。レストランの赤字をブリーディングの収益でまかなっていたので、レストラン経営がうまくいっていないという感覚があまりなかった。しかし、最終的には50万ナairaの借金をしてしまい、レストランを閉めてブリーディング業に専念することにした。母親が所有していた不動産物件をもらって、その家賃収入をえるようになった。ところが、34歳のとき、飼っていた犬7匹が感染病にかかって死んでしまった。

36歳のとき、心機一転アブジャに転居した。父が国防大臣の友人であったこともあり、母は国防省の物品納入業者入札資格をもっていた。そこで、自分もその仕事をするようになる。しかし、多数の物品納入業者がいたので、入札によって落札できるのは年2～3回しかなかった。アブジャでは薬物には手は出さなかった。たまにエヌグやラゴスに行って吸うことはあったが、ほとんど吸わなかった。37歳で母が肺癌で亡くなり、現在の妻と結婚する。妻とは昔付き合っていたことがあり、アブジャで再会した。38歳のときに友人がジョイントの場所を教えたことで、アブジャでもコカインを始めるようになってしまった。薬物をやめたいと思い、今年6月に自分の意思でアロ病院に入院した。

母親がなくなるまでに薬物に300万ナairaを使っていた。また、母親の死後、その遺産が入り、さらに400万ナairaを薬物に注ぎ込んでしまった。もともと家庭が裕福だったので、薬物を買うお金には困らなかった。薬物依存症者のなかには、お金に困って物を盗んだりする者もいるが、自分はそんなことはしなかった。ひどいときは1日5000ナairaも薬物に費やした。結婚してからは、母の遺産や自分のお金を妻の預金口座に入れて、あえてお金を自由に使えないようにした。妻は「薬

物をやめなさい」とは言わなかったが、少しずつ減らしていくようにいろいろな方法を考えてくれた。アブジャにいた2001年から2003年までは、薬物をほとんどしていなかった。アブジャでは薬物を入手する場所を知らなかったからだ。薬物をしたいときはエヌグやラゴスに行って1～2週間吸い続けて、またアブジャに帰るというような生活をしていた。しかし、2003年になってアブジャでもコカインを入手できる場所があることがわかったと、そこに行って吸うようになった。午後に家を出て、夜まで薬物を吸い続け、深夜に帰宅する。そうすると妻や子どもは寝ていて、妻は翌朝仕事に行き、そのとき自分は寝ている。そんなすれ違いの生活だった。やがて、これではいけないと考えるようになった。

⑤病歴

13歳のときにタバコから始まり、カンナビス、ビールを始める。20歳のときにアメリカのパーティでコカインを吸う。アメリカでは週末にパーティをするときは、お酒をゲストに出すのと同じような感覚で薬物を振舞う。22歳のとき、タバコをやめてカンナビスに切り替えた。初めての治療は33歳か34歳のときに受けた。ジョスにある薬物依存症のリハビリテーションセンターに2カ月間入院したこともある。アロ病院よりも自由で、特に何をするわけでもなかった。センターは白人牧師が経営していたが、その牧師とうまくいかずに2カ月で退所した。入所者を見下すような牧師の態度が気にいらなかった。妻と結婚して、薬物をやめたいと思い、再度そのセンターに戻ろうと思ったが、先方から断られた。その後、センターから来てもよいという電話があったが、今度は自分から断った。薬物をやめると攻撃的になり、とてもイライラした。今年6月、アロ病院内の治療施設の評判を聞き、従兄弟と一緒に見学に来てみた。話を聞いてとてもよいプログラムだと思ったが、病院がちょうどストライキ中だったので、そのときは入院せず、ストライキ終了後に入院した。妻には「今度こそ薬物をやめるよ」と言ったが、信じてはもらえなかった。でも、彼女は、入院後すぐに会いに来てくれた。

⑥入院生活

最初入院した頃は、男性病棟に入院し、そのスタッフとうまくいかなかった。自分は血圧が高いと言っているのに薬を処方してもらえず、とてもイライラした。その後、薬物病棟に移った。入院生活で嫌なことといえば、①専門職のスタッフはよいが、掃除人などの訓練が十分ではないため、入院患者に対して命令口調で話しかけたりすること、②食事がまずいこと（自分は追加料金を払って特別メニューの食事をとっている）、の2点がある。しかし、それ以外は、ここでの生活は気に入っている。薬は飲んでいない。治療としては、グループセラピーや職業訓練（パソコン）をしている。このプログラムは気に入っているし、同室の仲間とも仲良くやっている。お金がない仲間には必要なもの（ビスケットなど）を買ってやることもある。すると、自分を頼りにしてきて、いろいろと相談ももちかけて来るようになった。たとえば、「ここを脱走したい」と相談されたこともあった。しかし、そのときは、「脱走なんてやめろ」と助言した。

1週間に3～4冊の本を読む。家にいたときも読書が好きだった。その他には運動や映画も好きだった。運動しているときは薬物を吸わなかった。

ここにいると薬物がないので平穏でいられる。環境こそが大切だと思う。ここでは薬物が手に入らないので大丈夫だが、いったん退院すると簡単に手に入ってしまう。どこで薬物を買えるのかをもう知りたくない。昔の友人とも関係を切りたい。自分は父親であること、子どもや妻に対して責

任をもつべき人間であることを自分に言い聞かせている。

妻は今までにアブジャから3回ほど面会に来てくれた。1回は息子も一緒だった。よい友人は薬物をしている間にすべて失ってしまった。

ソーシャルワーカーはときどきこの病棟にも来る。電話をかけるときはソーシャルワーカーに許可をとらなければいけない。自分はソーシャルワークを勉強したが、ナイジェリアでソーシャルワーカーに会ったことがなかったので、ここにソーシャルワーカーがいること、ナイジェリアでもソーシャルワークの仕事が存在することを知って驚いた。

⑦問題・ニーズ

特にない。

⑧将来の希望

今年10月初旬に退院する予定でいる。薬物依存症の場合、最低でも3カ月間は入院しなければならない。自分はすでに3カ月間入院しているし、妻がベビーシッターを雇いながら子育てをされていて大変なので、退院をしたいと思うが、もう少しここにいて治療を続けるつもりでいる。退院後は商売をしたいと思っている。電気製品をサウジアラビアで仕入れて、アブジャで売のような商売をしてみたい。

⑨コメント

彼は、薬物病棟におけるリーダー的存在らしい。「人の世話をよくするようになった。ここにいると落ち着いていられるし、何より我慢強くなった。前は気が短くて、こうして長い間椅子に座っていることもできなかった」と語ってくれた。